

勢
伊
勝
冠
東
晉



惟神

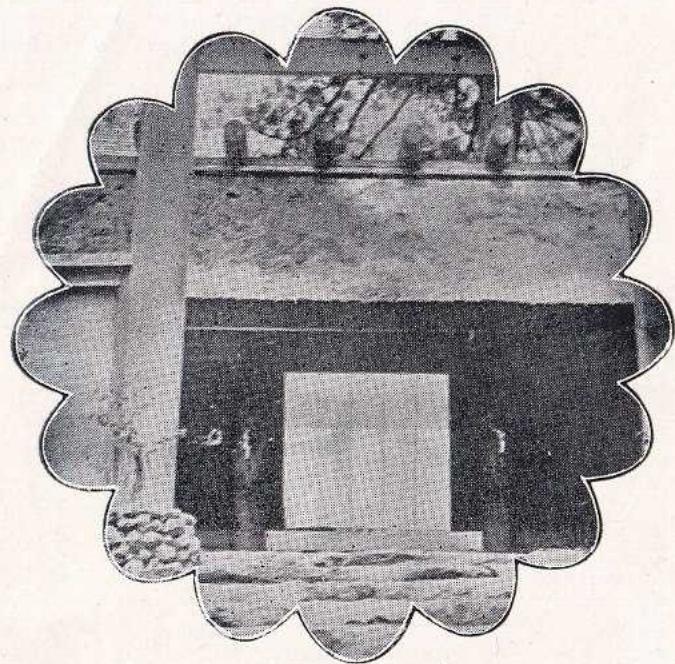
品川正義著

謂隨神道亦
自有神道也

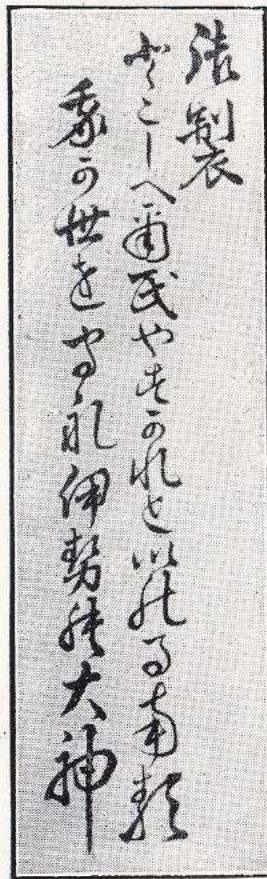
右日本書紀本文木註

平篤胤謹書

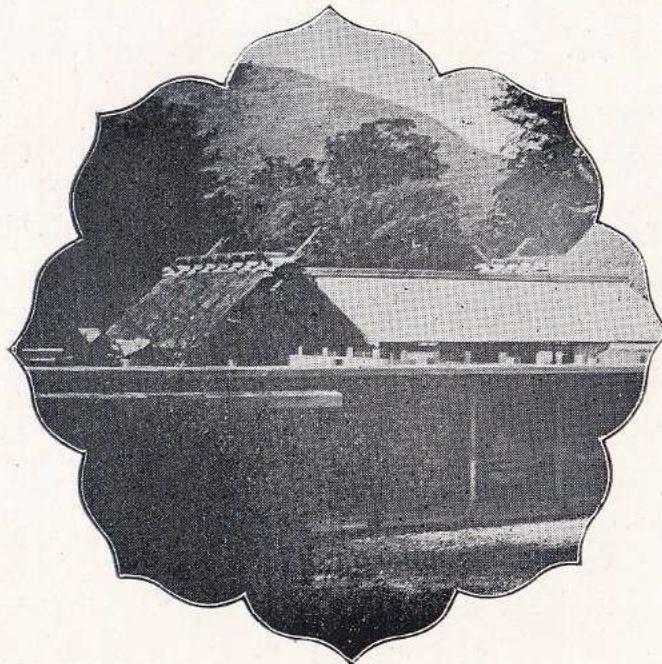




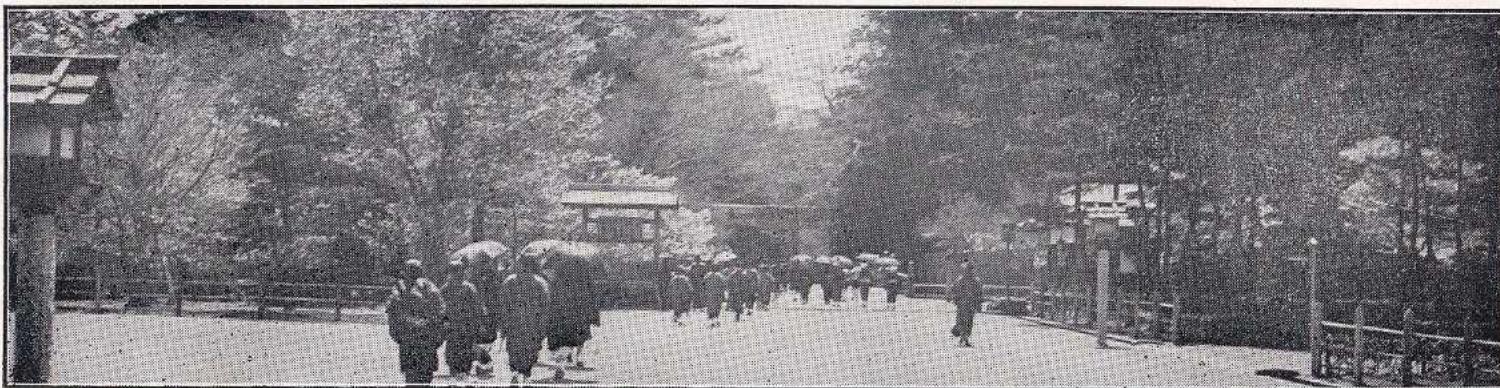
(二) 面正殿正御



(三)

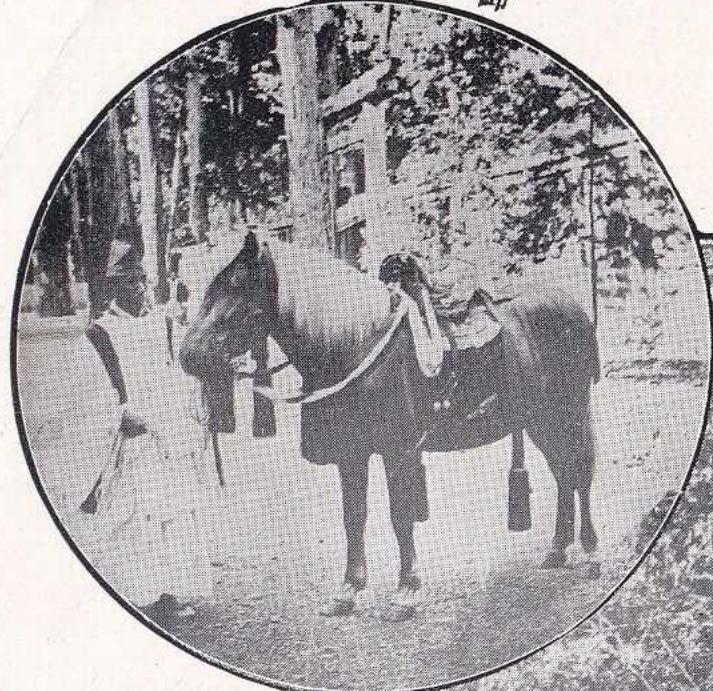


(一) 殿正御宮内

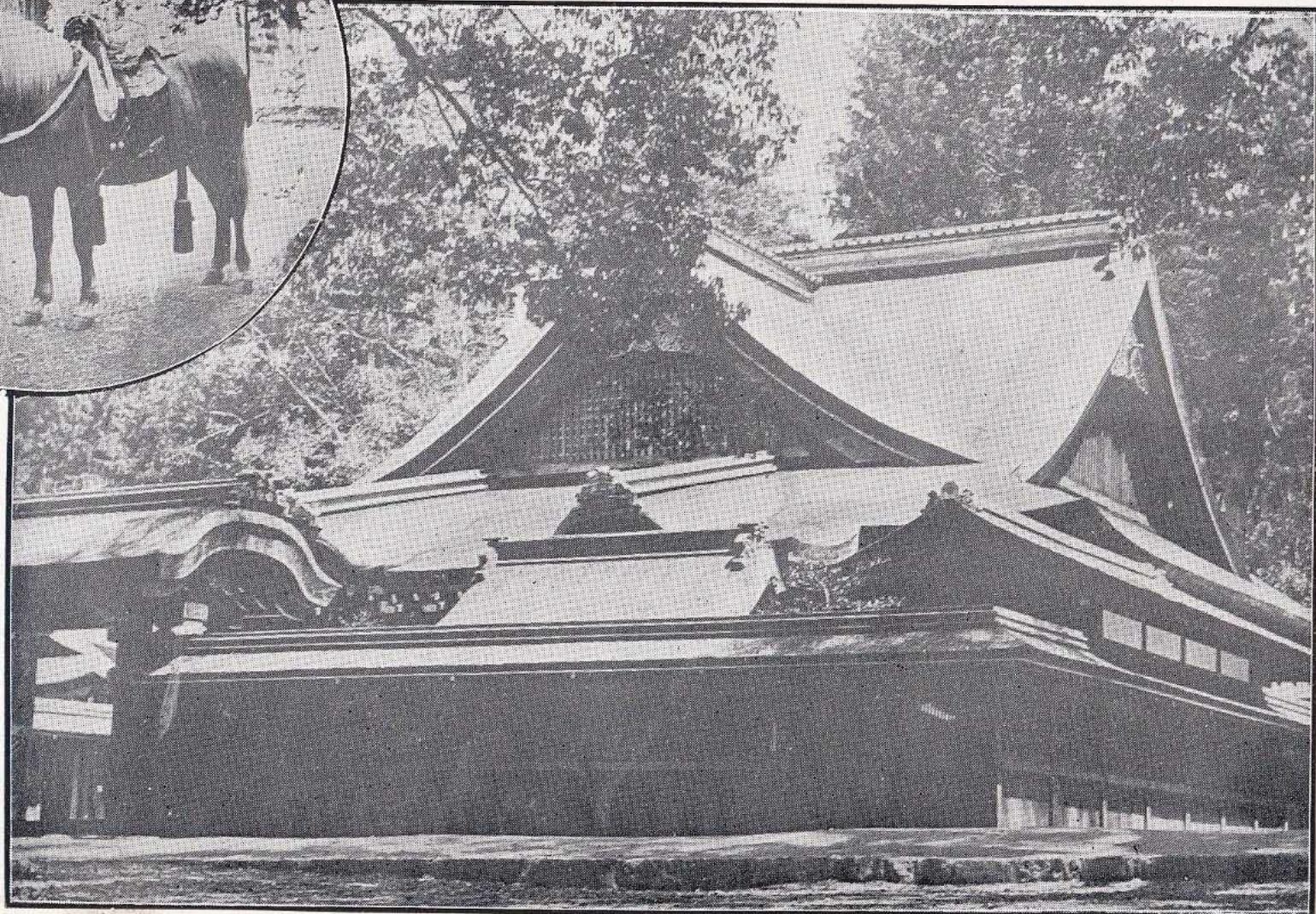


(四) 居鳥ノ一宮内

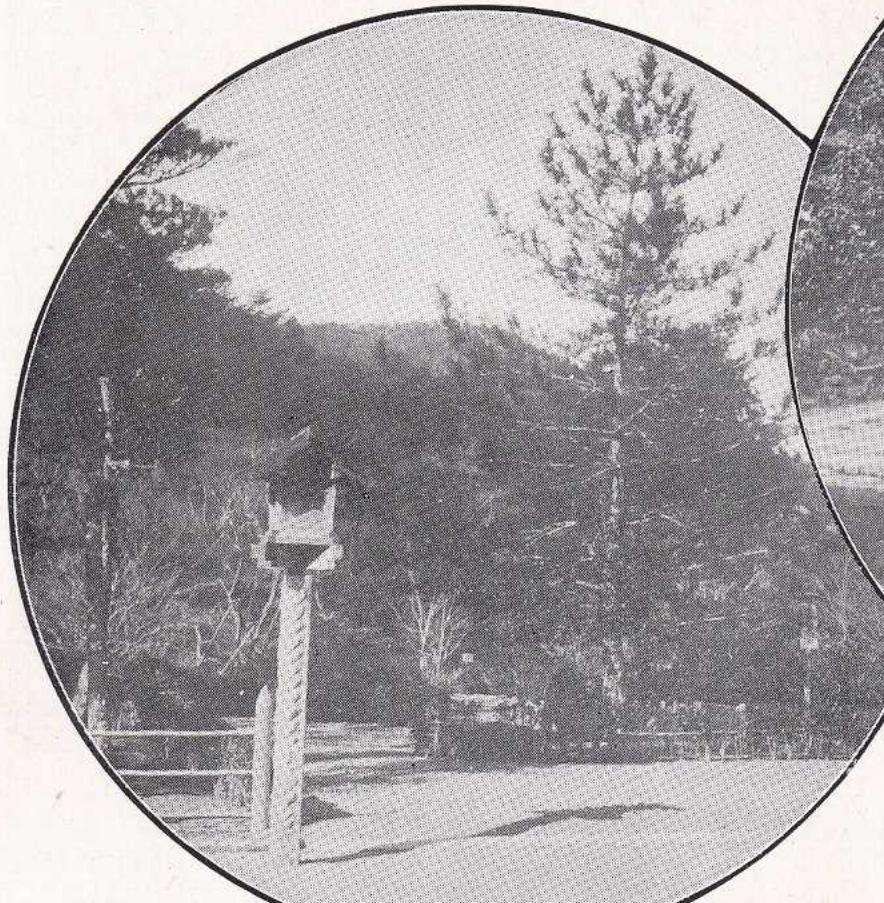
馬 神 御



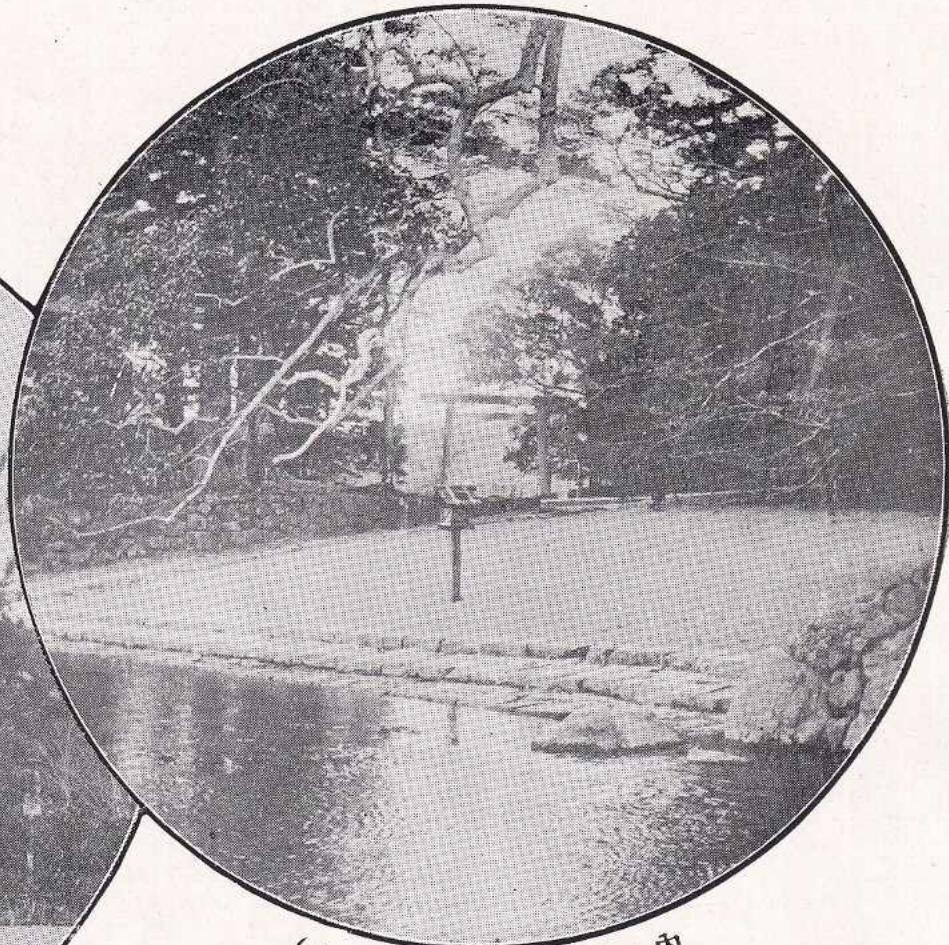
(六)



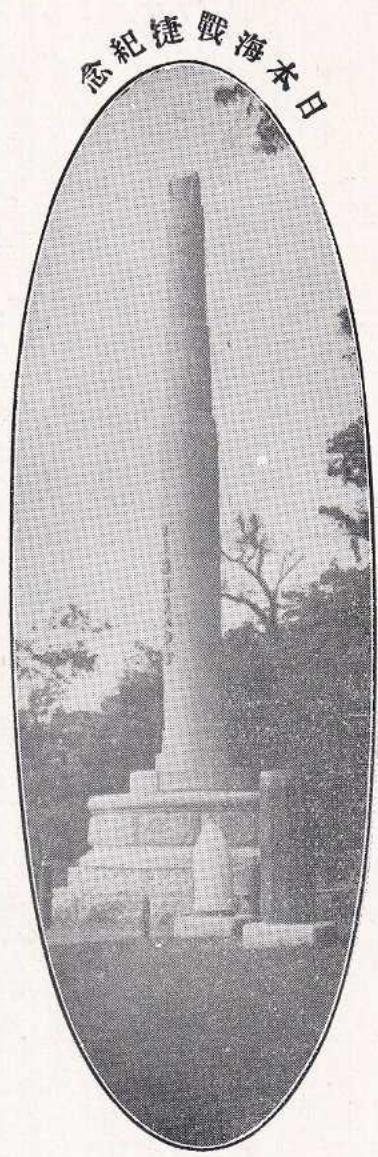
(五) 殿 神 御 宮 内



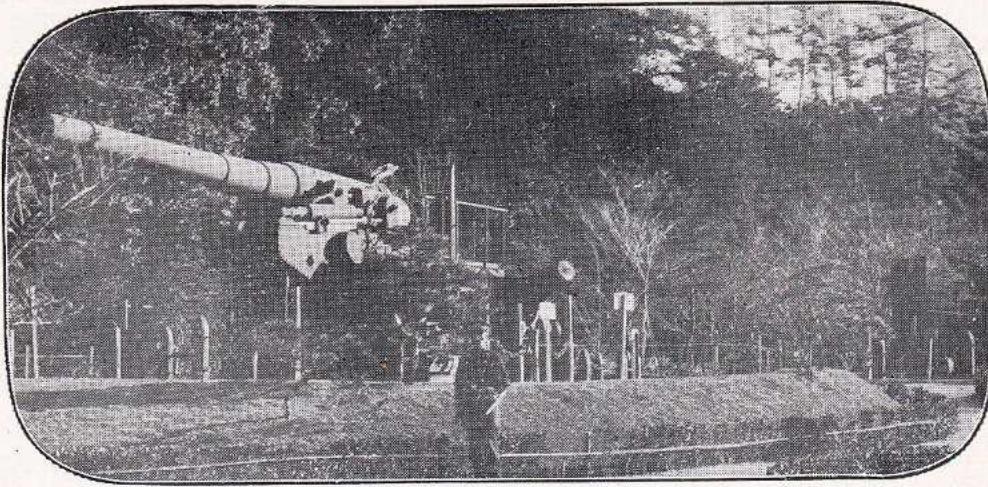
(八) 松植手御宮内



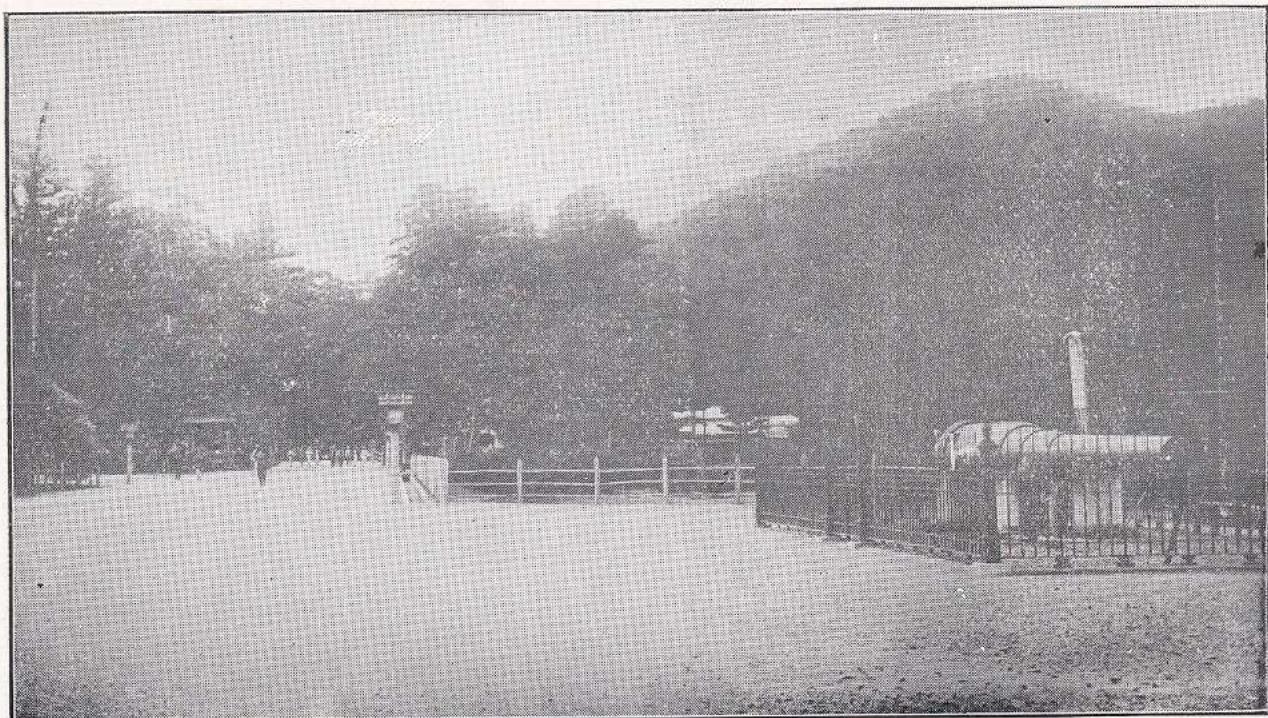
(七) 塩洗手宮内



(一十)



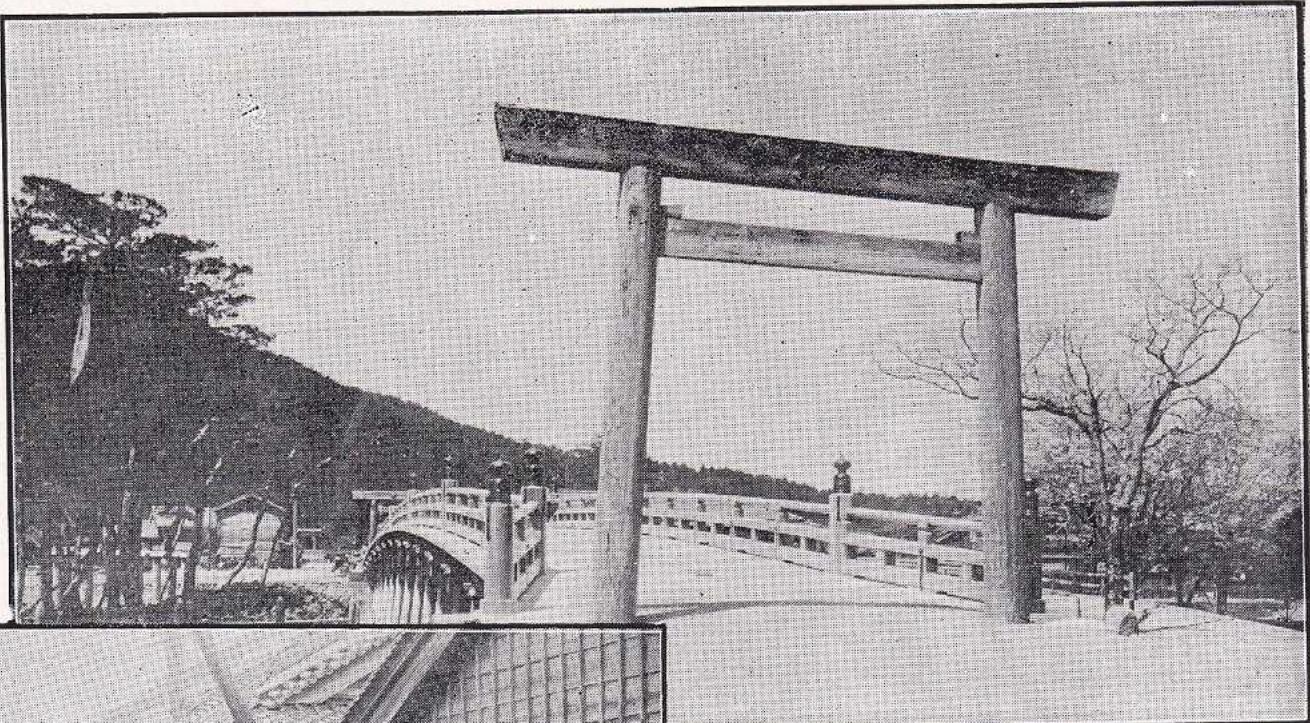
(十) 炮念紀役戰露日



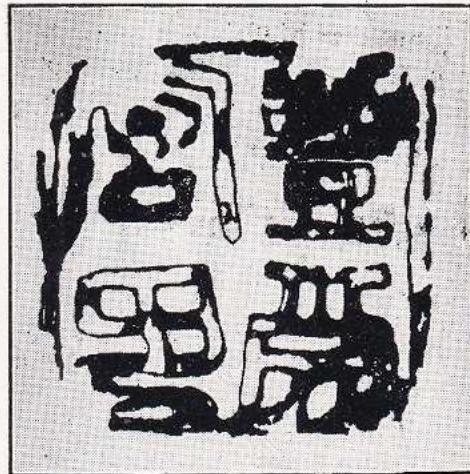
(九) 苑神宮内



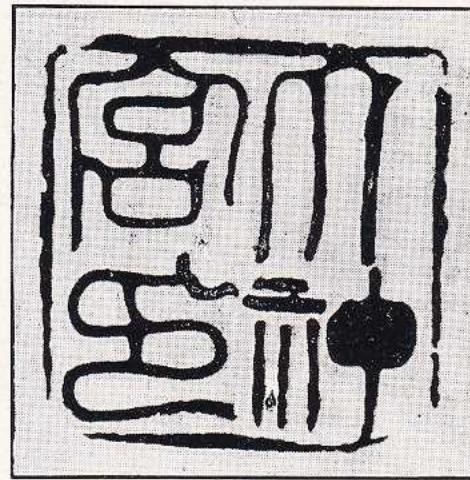
(三十) 埋奉材用御



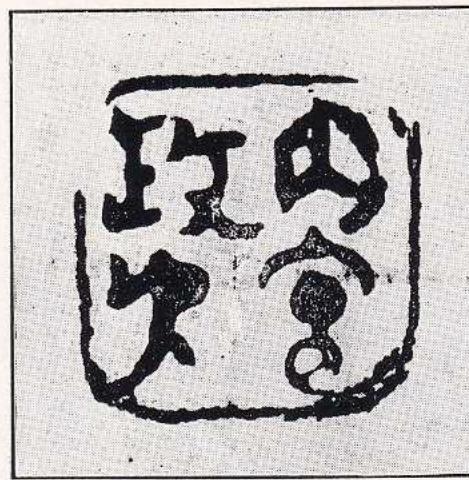
(二十) 橋治宇



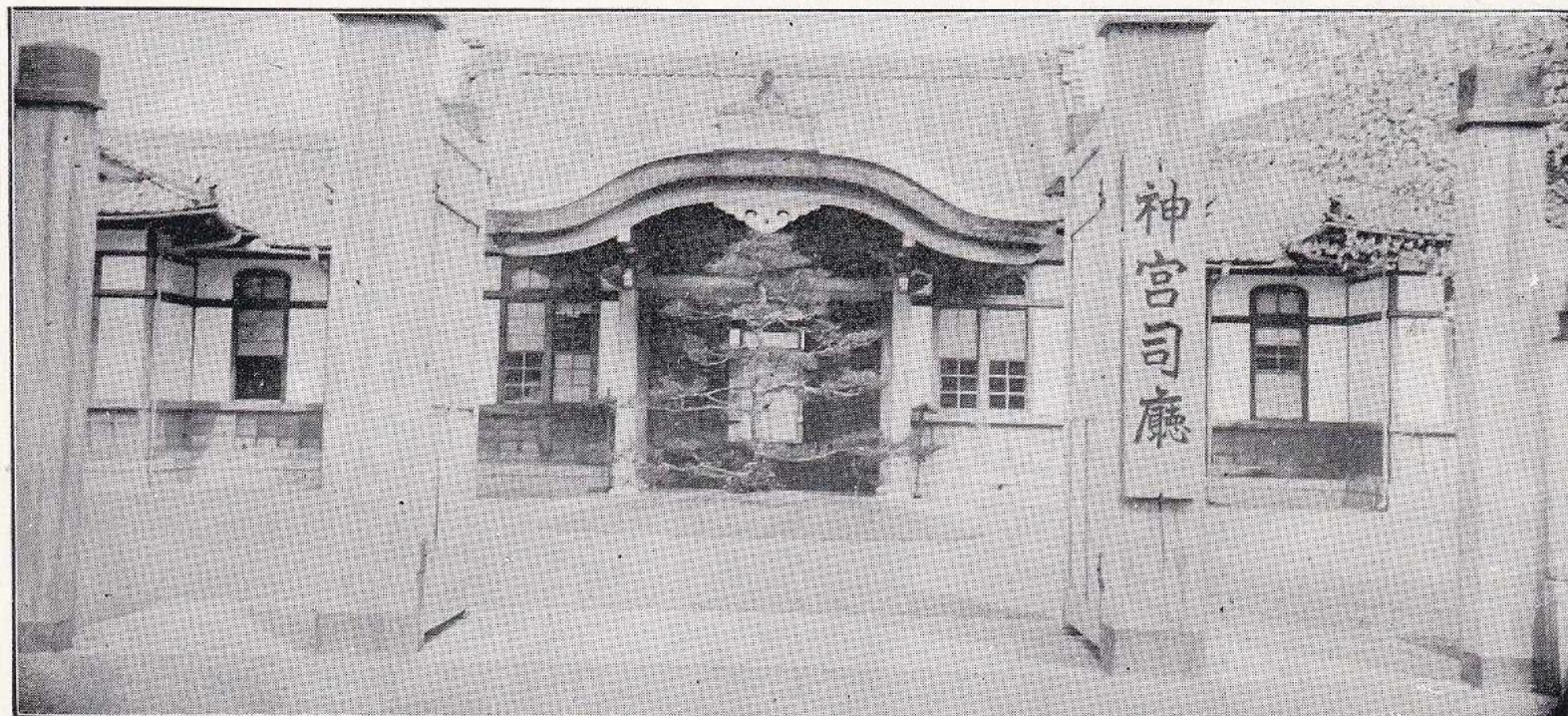
(三 其)



(二 其)



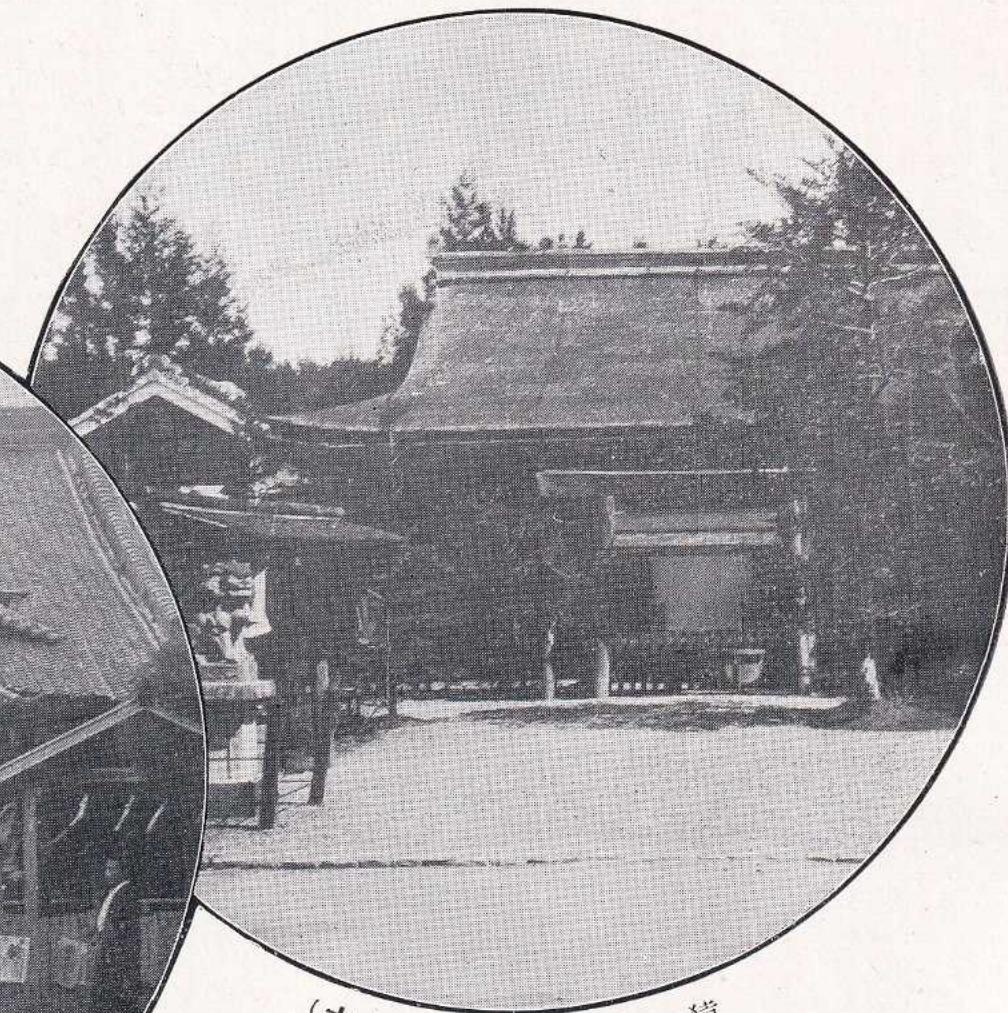
(一 其)



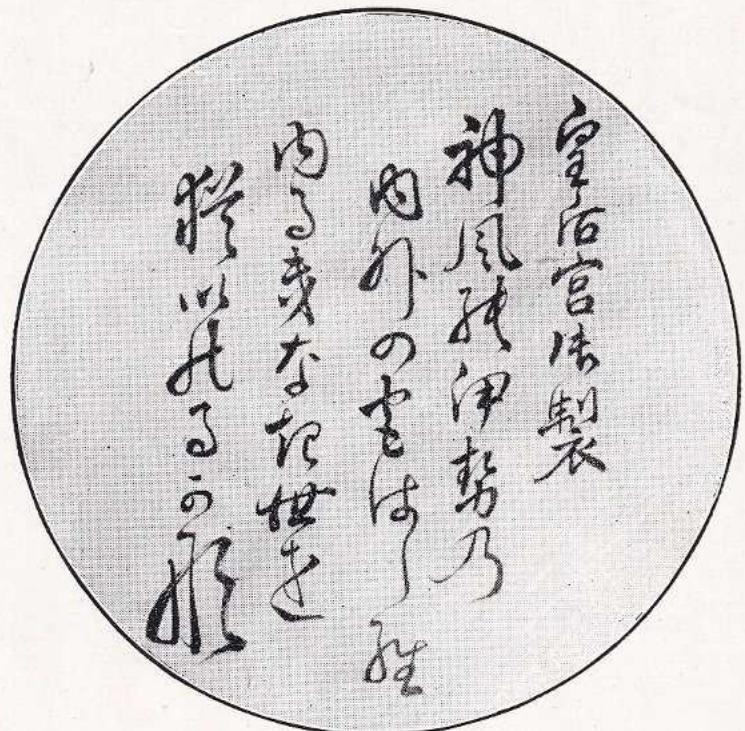
(五十) 廳 司 宮 神



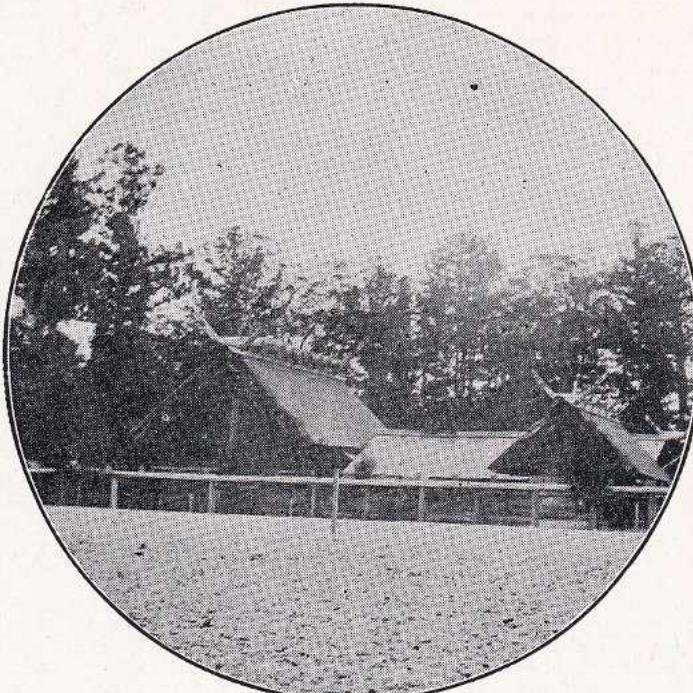
(七六) 部本大會齋



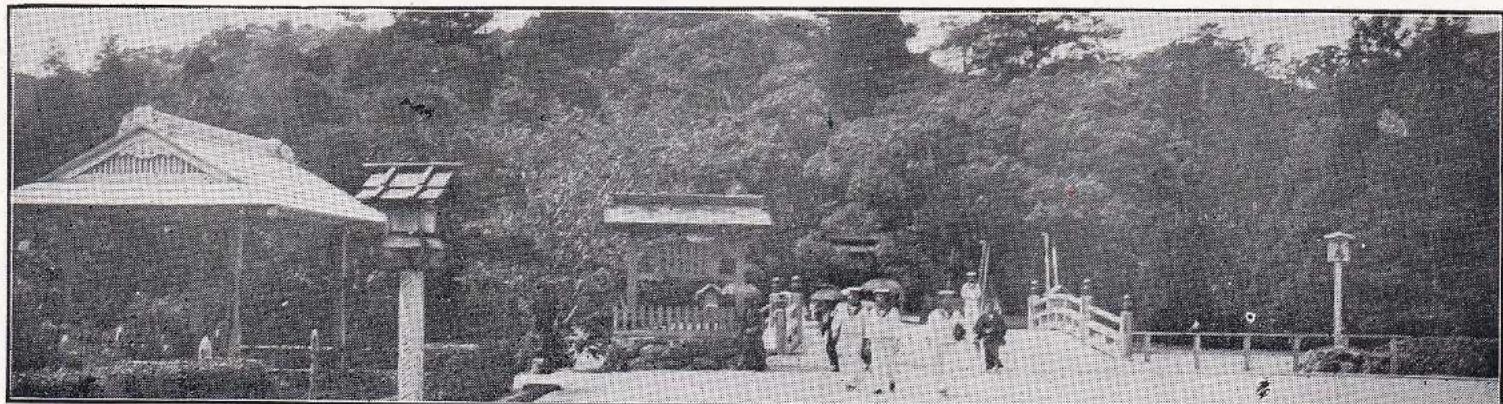
(六十) 猿田神社



(九十)



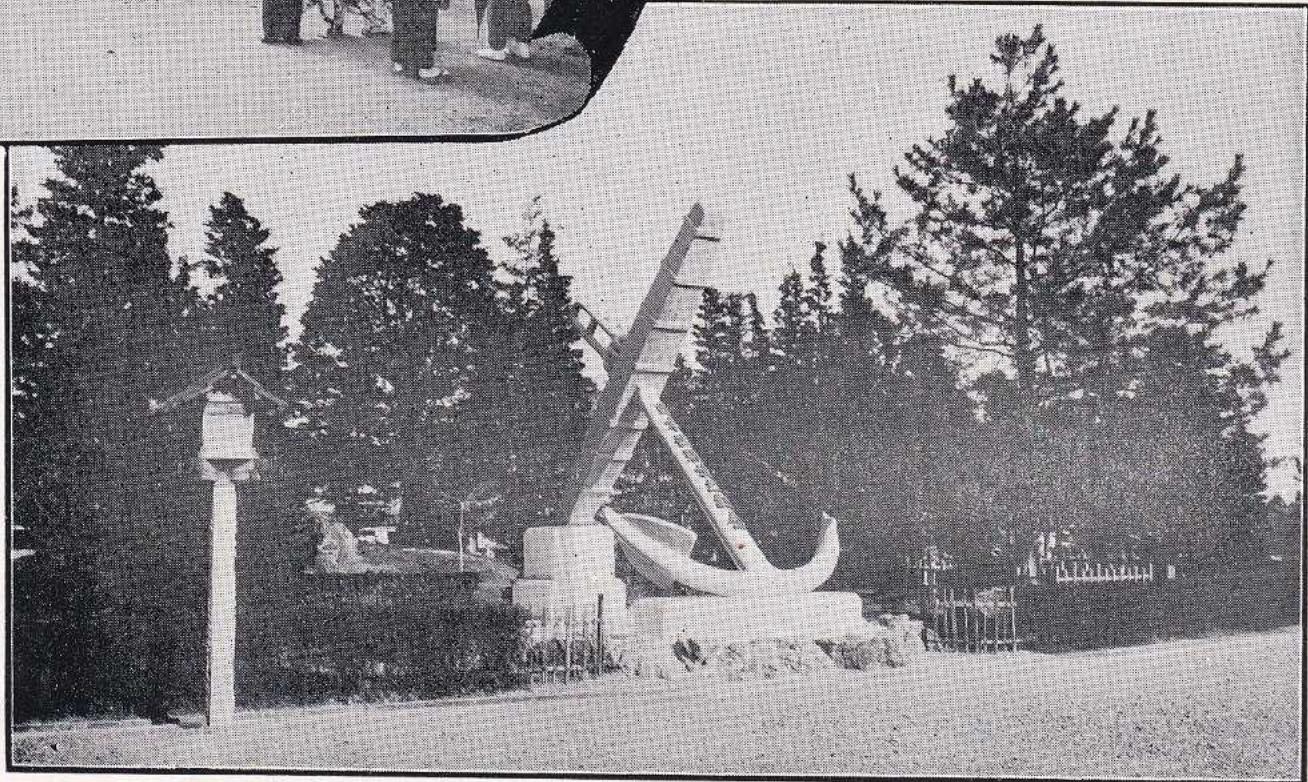
(八十) 殿正御宮外

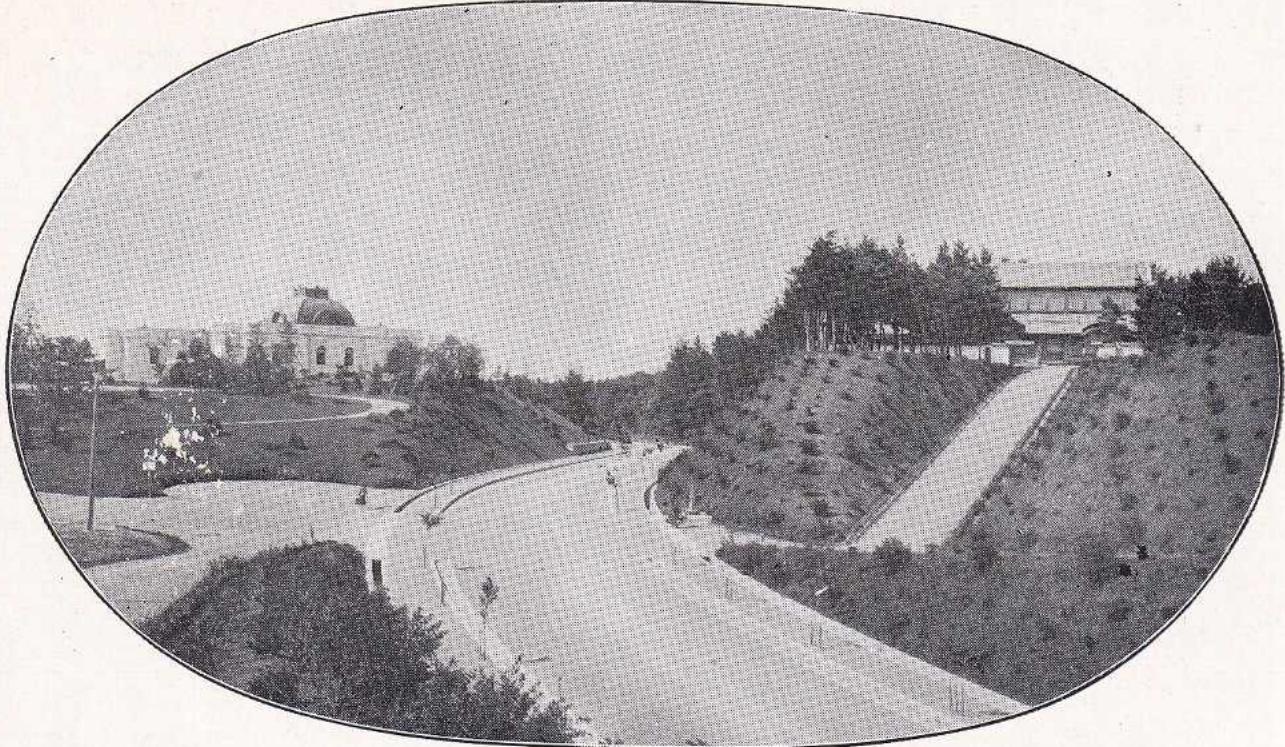


(十二) 居鳥ノ一宮外

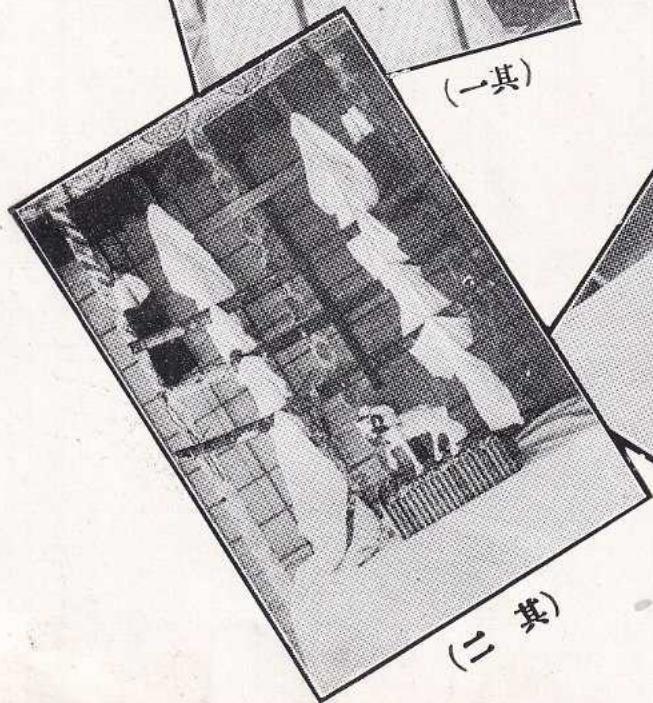


(一十二) 獻奉石白



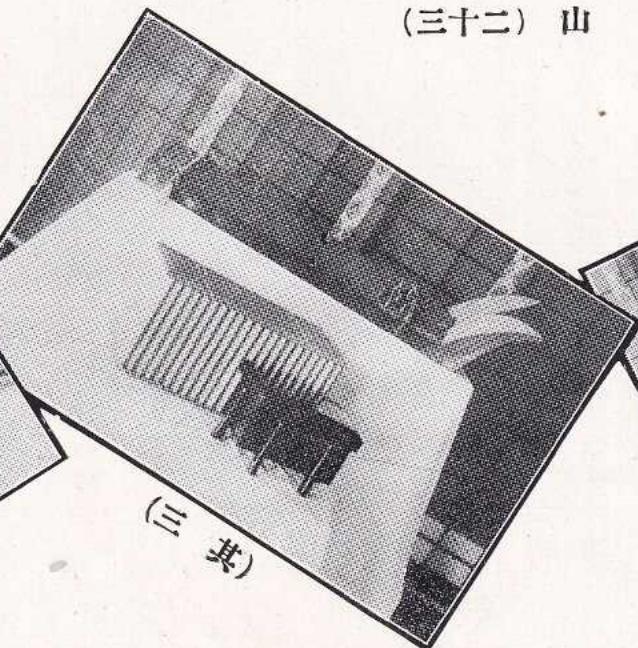


(三十二) 山 田 倉

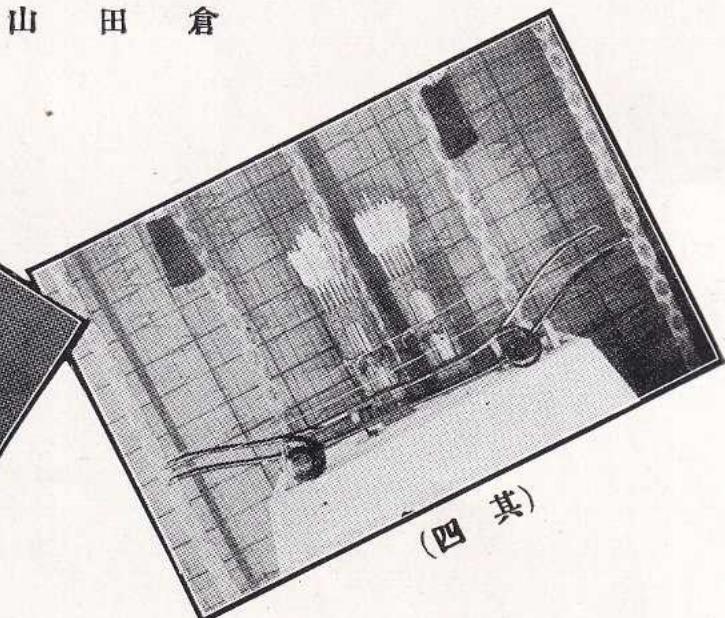


御 神 寶 (二十四)

(一其)

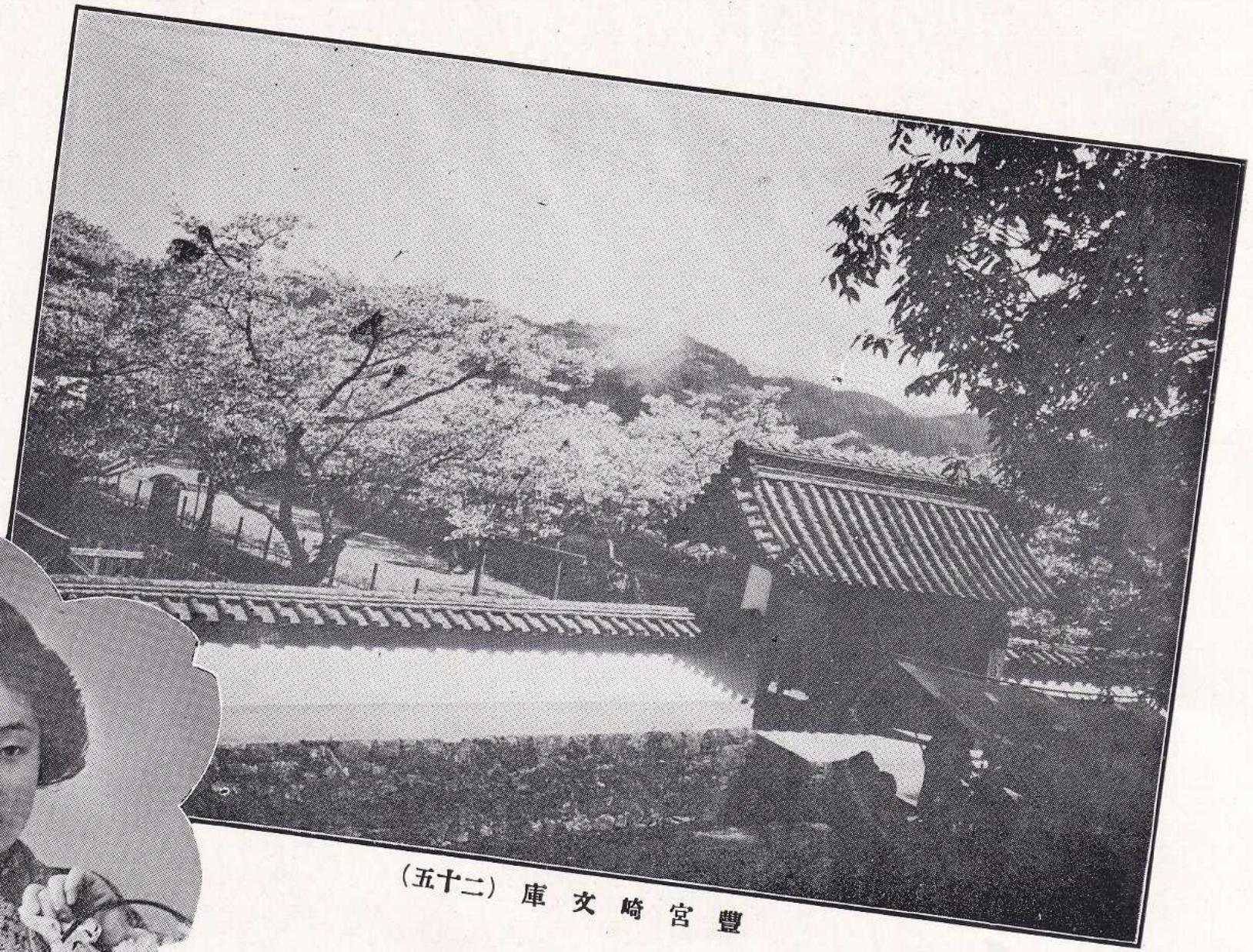


(三 其)



(四 其)

(二 其)

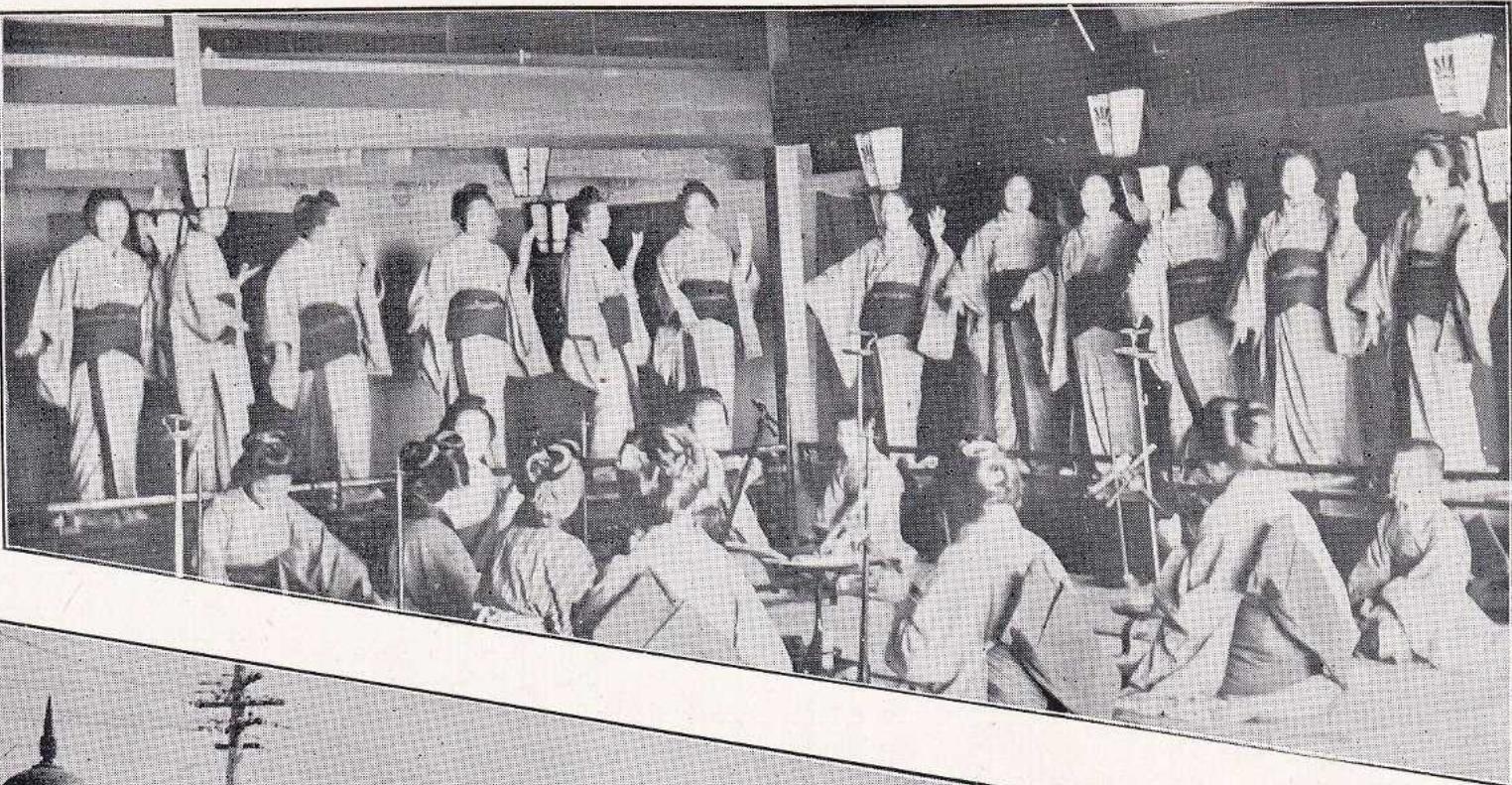


(五十二) 豊宮崎文庫



(六十二) 伊勢の花

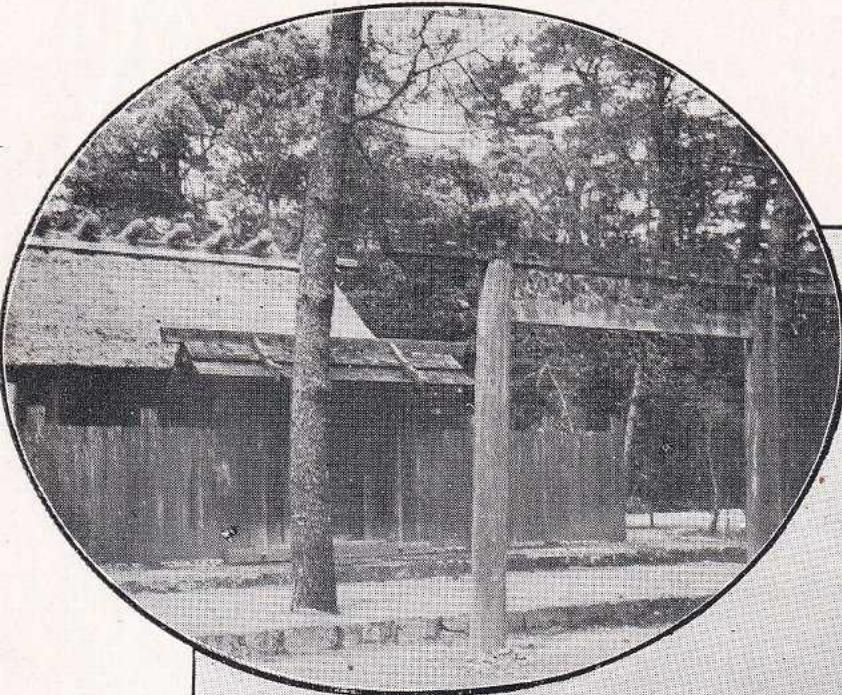
伊勢古市音頭（二十七）



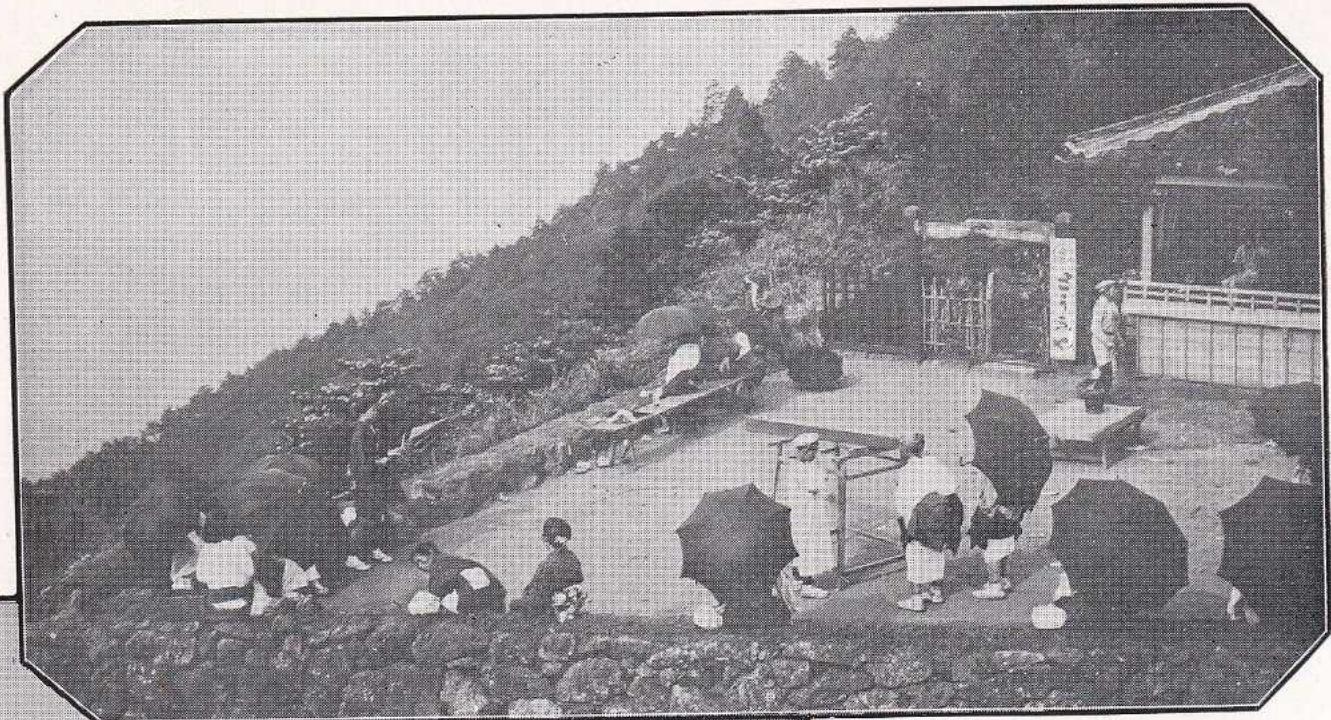
御幸街道（二十八）



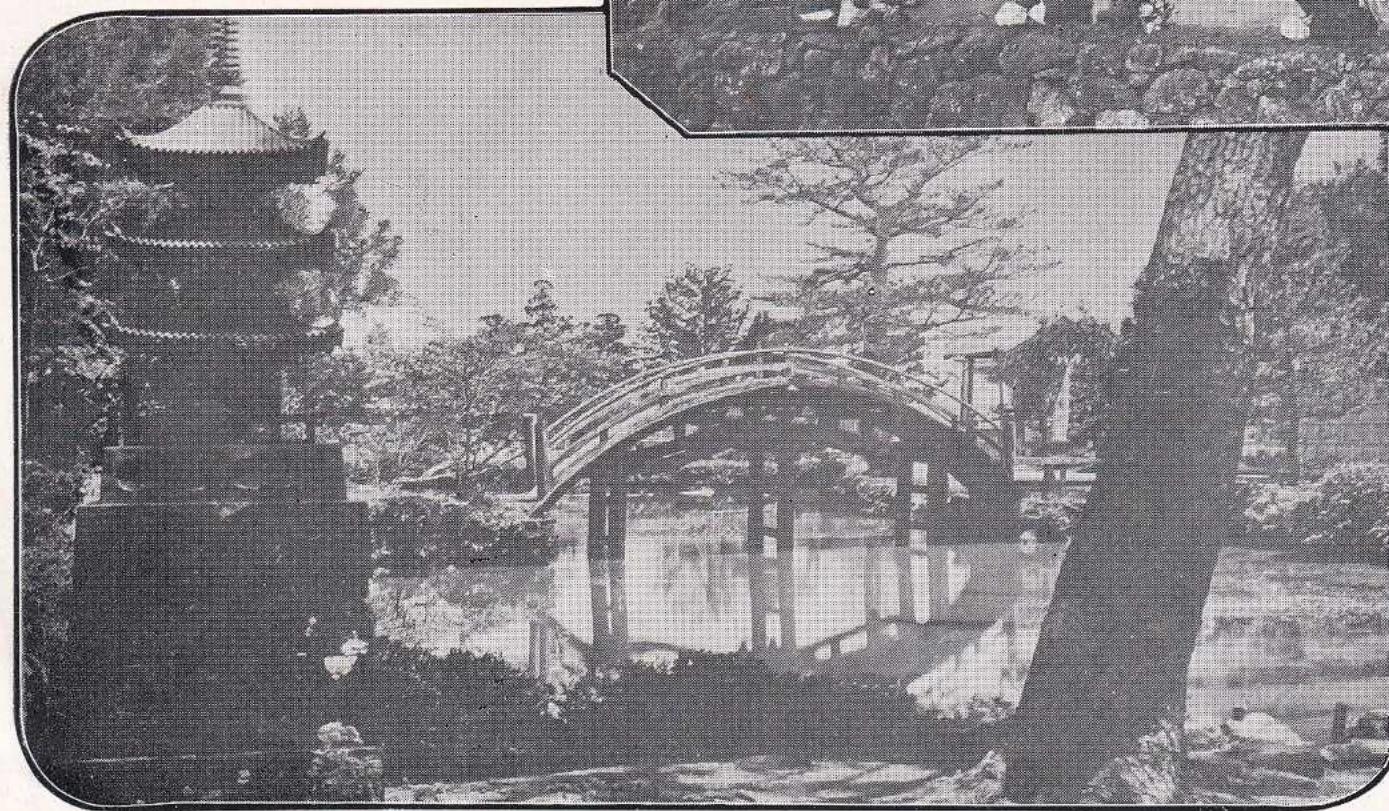
(九十二) 殿 鹽 御



(十三) 浦 見 二



(二十三) 望眺洲八十

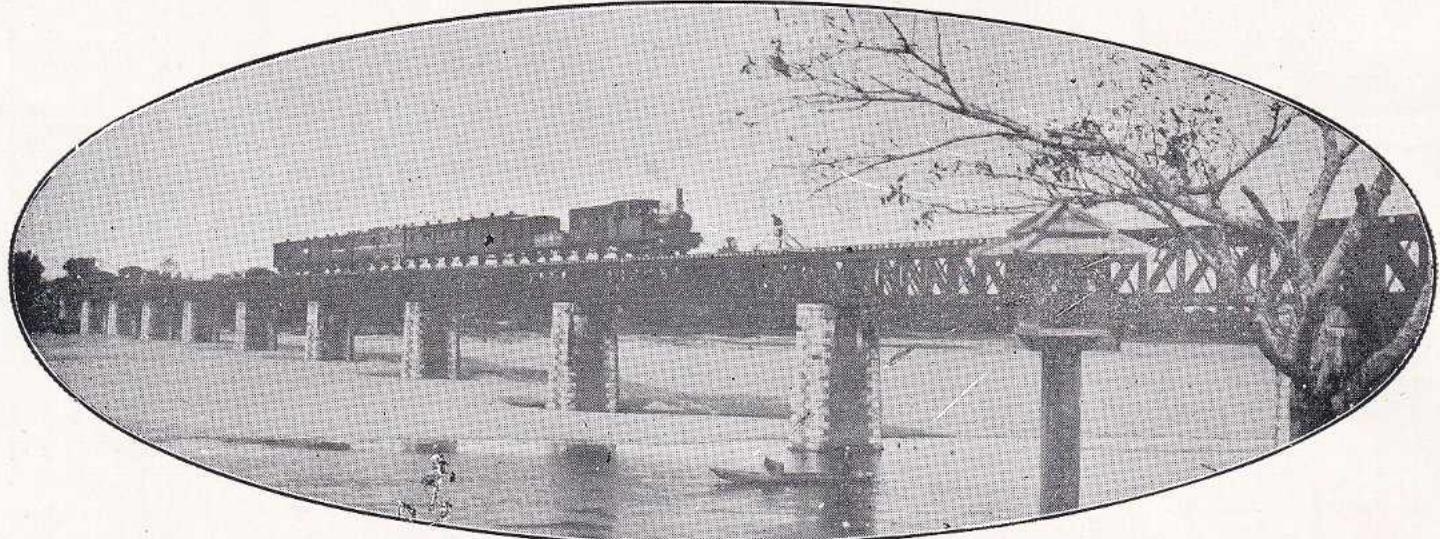


朝熊岳（三十一）

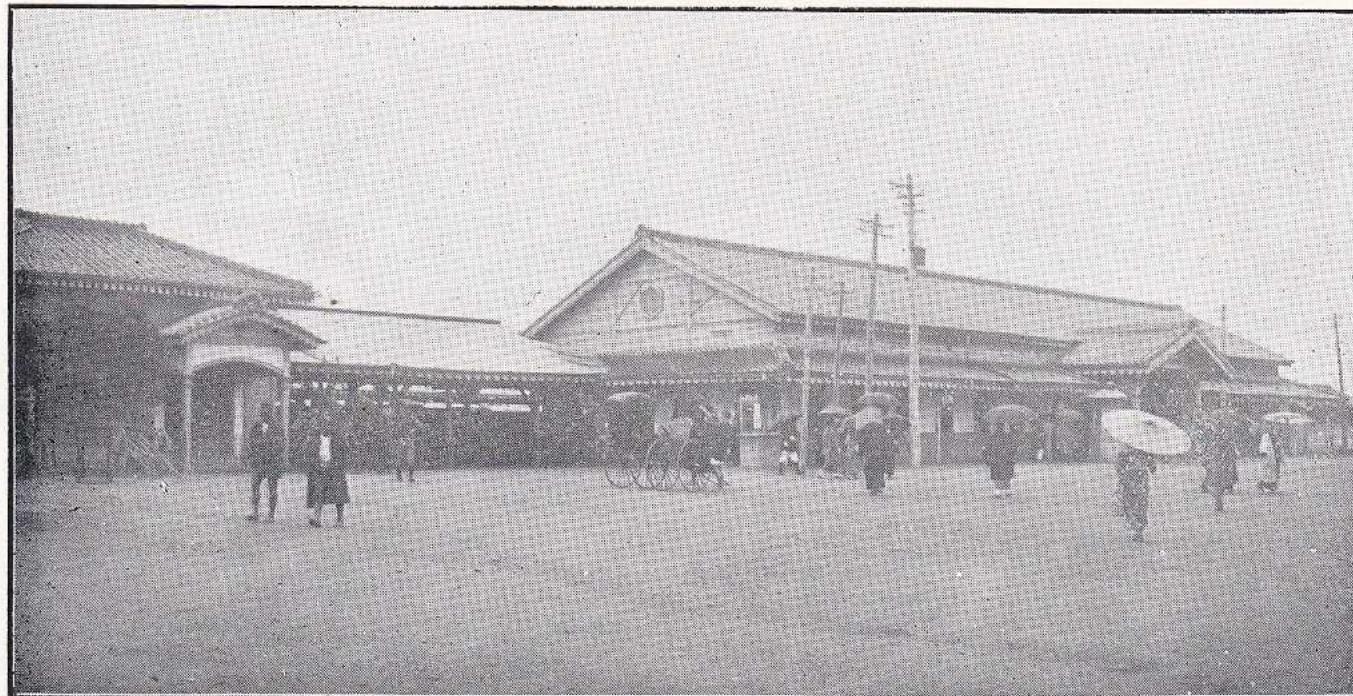
(四十三) 取 鮑



(三十三) 港 羽 島



(五十三) 橋 鐵 川 宮



(六十三) 場 車 停 田 山

伊勢名勝寫眞略說

○内宮御正殿

〔一圖〕皇大神宮は、又五十鈴宮、朝日宮とも稱し奉り、天照大御神を齋^{いつ}奉れる大宮なり。相殿神は、天手力雄神、萬幡豐秋津姬命の二座坐^{まし}ます。垂仁天皇の御宇、皇女倭姫命大御神を奉戴し、御教に隨ひ、五十鈴の川上此の大宮地に鎮め奉らせ給ひしなり。これ實に垂仁天皇の二十六年冬十月十七日（紀元六百五十七年）のことなりきこそ。偕て御神殿改造の大典は、御鎮座以來六百年間の事詳ならず。天武天皇の御宇に至り、二十年を以て一期^ご、勅定せられたり。持統天皇四年に、新に神殿を御造營、九月十六日遷御の大禮を行はせられたり。其の後一千二百餘年間に、正遷宮五十七回。明治四十二年に行はれし正遷宮は、實に古來未曾有の御盛典にて、國庫金壹百餘萬圓を支出し、其の費に充てられたり。宮殿の結構、神寶の粧飾等、文物典章の粲然たりし、延曆、延喜の頃と雖もかくは非りしなるべし。

○正殿正面

（二圖）第一の御垣なるを、板垣の御門又冠木の鳥居^{いたがき}と稱ふ、第二の御垣は、外玉垣^{そとたまがきのこもん}御門にして、俗に十二所御門と稱へり、衆庶は此の御門下にて參拜す。此の御門内の鳥居を、中重の鳥居^{なかのへ}と稱ひ、又其の根に榊を樹てられたるを以て、八重榊の鳥居^{やへざかき}とも稱ふ。鳥居の左右に石壺あり、中重の版居^{なかのへはんゐ}と稱ふ。右なるは勅使、掌典補等の座にして、左なるは祭主、大少宮司、十員禰宜の座なり。右手なる御殿を四丈殿^{よじょうでん}と稱へ、奉幣の時、官幣を點檢する所なり。又雨天の祭典には、中重の版位、并に祭文讀進等をも此の御殿にて行はる。第三御垣は、内玉垣^{うちたまがきこもん}御門にして、祭典の節勅使以下此の門下にて太玉串^{ふさたまぐし}を奉らる。故に玉串御門^{たまぐしこもん}とも稱ふ。其の次なるは、蕃垣御門^{はんがきこもん}にして、俗に猿頭御門^{さるかしらごもん}と稱ひ、御門のみにて御垣、御扉^{みかき}もなし、第四御垣は、瑞垣御門^{みづがき}なり。内院より第一の御垣に付たる御門にして、内院中御門^{ないゐんなかのこもん}とも稱ふ。御正殿の後左右にあるは、幣物を納め奉る東寶殿^{とうほうでん}、幣馬の鞍、古神寶等を納め奉る西寶殿^{さいほうでん}なり。

○一鳥居

〔四圖〕内宮第一の鳥居なり。其前に一鳥居橋あり。城内の御池より流出する川に架す。表參道にして行幸啓、并に勅使參向等、總て此より參入し給ふ。傍に下馬札及禁令の制牌立てり。鳥居の内參道の左手なる御殿は、行幸啓

の時に用に供せんとして設けられたる行在所にして、續屋は神宮の齋宿する參集所なり。二鳥居にて皇族方參拜の御砌下乗せらる。又官幣、及勅使并に隨員の修祓を行ふも、亦此處なり。御神樂殿の前より風宮橋を渡りし右手に坐ますを、風日新宮ひのりのみやと稱へ、祭神は志那津比古神しなつひのかみに坐ます。御本宮の北に坐ますはあらまつりのみや荒祭宮と稱へ、祭神は大御神おほみのかみの荒魂あらみたまに坐ます。共に皇大神宮別宮なり。

○御神樂殿（五圖） 參道の左にあり。衆庶の志願によりて御神樂を奏し、御饌みけを供進し、及大麻曆を授與する所なり。志願者は受附係等に就かるゝもよし。舊師職に案内を受ければ、總ての事便宜なり。委細は旅館の者に取扱はしむるをよしこす。

○御神馬〔六圖〕 宮内省より奉獻せらる。

○五十鈴川手洗場〔七圖〕 五十鈴川の水源は、神路山及伊勢志摩の國境なる逢坂おほさか山より出て、此の手洗場の上にて落合ひ、大河となりて北に流れ、伊勢海に入る。其の長さ四里。此川の又名を、御裳濯川みもすそかは、宇治川うじかはと稱す。此の川の岸に石を疊み、手水を使ふに便ぜしは、徳川綱吉の生母本莊氏の寄進なり。

平らかに年浪ひへる五十鈴川神の惠の深さこそ汲む（三十九年御題新年河） 東宮殿下御詠
靜かなる世の年浪は神風の五十鈴川より立ちかへるらむ（同上） 皇后陛下御歌

○皇太子殿下御手植松〔八圖〕 明治二十四年御參拜の御時、御手づから植に給ひし松なり。

○内宮神苑地〔九圖〕 明治二十二年五月、神苑會の經營せし所、勝景雅趣は人工の及ぶ所に非す。其美觀の裡に雄壯なる獻納砲あり。

○日露戰役紀念砲〔十圖〕 陸軍省の奉獻、其の一は、二十三吋加農砲にして旅順要塞摸珠礁第二砲臺に備付け、彼が主として海面防禦に使用せし、入門の一なり。其二は、二十八吋米榴彈砲にして明治二十四年大阪砲兵工廠の製作なり。我軍旅順攻圍砲擊の際、偉功を奏したるもの。其三は、二十四吋加農砲にして、彼が旅順要塞勝嶺咀高砲臺の右翼に備付け、我が攻圍軍を射擊したるものなり。參道の中央左側なるは、征清紀念として、第一軍司令官野津大將の獻納せし、金陵機局製造クリップ式大砲及檯槍銃なり。右側なるは、第二軍司令

官大山大將の獻納せし、二十四吋米突砲、其の彈丸なり。

○日本海戰捷紀念碑　〔十一圖〕　宇治橋を渡りし左手に矗立する巨砲は、明治三十七八年役日本海海戰の際捕獲せし、敵の戰鬪艦アリヨール號（現名石見）の主砲たる十二吋砲にして、我砲彈の爲めに折損せられたる、其の前部砲塔の左砲身なり之れ海軍省より奉獻したるものなり。

○宇治橋　〔十二圖〕　宇治町と神苑地との間。五十鈴川に架せる橋なり。俗に大橋といふ。橋の前後に大なる鳥居を建てたり。西鳥居より東鳥居に至る五十七間、橋の長五十一間、闊四間なり。總て檜作にして欄干に擬寶珠を置く。往古は宇治町の中央より岩井田山に架したりしな、永享六年足利義教寄進の時、今の所に移されたり。本橋架替造營は、神宮式年遷宮の毎度にありて、壯嚴なる渡始式を行はる。

新らしく宇治の大橋かけまくも畏き神のためしなる哉

三室戸大宮司

宇治橋の西、鼓ヶ岳の麓にあるは、林崎文庫にして、庭前に櫻楓多し。神域の美觀は雙眸に集り、繪卷物の如し。此文庫は、天明年間内宮權柄宜荒木田神主蓬萊尙賢が僚友と謀り、書庫、講堂、塾舍等を建て築きたるなり。明治六年宇治會合衆より、神宮に獻納す。講堂の横に文庫の碑あり。一は本居宣長の選文にして、屋代弘賢の書、一は紫野邦彦の選文にして、淺野長祚の書、又東江源鱗の書なる孝經碑あり。講堂の額は、林信篤の書なり。

林崎まではいで通るべき鼓ヶ岳を打ちなめつゝ

長 明

○神宮御用材奉曳　〔十三圖〕

宮木引く津長の原の春の雪こよろもこけぬ跡をこそ見れ

元 長

○神宮古印　〔十四圖〕

其一、内宮政印は、皇大神宮御政印にして、天武天

皇の白鳳年間、禰宜荒木田神主石門の解狀に依りて、神祇官より上奏し、宣旨を賜はりて鑄下せられたるものなり。其二大神宮印は、大神宮司の政印にして、聖武天皇十一年十二月、神祇官の上奏に依りて、鑄下せられたるものなり。其

三、豐受宮印は、豐受宮御政印にして、清和天皇貞觀五年九月、禰宜度會神主眞水の解狀に依て、神祇官より上奏し、内宮政印の例に準して鑄下せられたるもの

なり。共に寶殿に納まれり。

○神宮司廳

〔十五圖〕 明治四年の創立に係り、神宮の事務を取扱ふ所なり。

明治三十六年四月、宇治町の中央今之地に新築す。明治三十八年十一月十三日、天皇陛下行幸の節、同月二十六日、皇太子殿下行啓の時、御宿所に充てさせられたり。其の前なる御殿は、祭主宮官舍にして、元慶光院の建物なり、天正年中豊臣秀頼、片桐且元を奉行として、創立せし古刹にして、維新後神宮司廳の所屬となり、明治二十三年大修理を加へ、祭主の宮の御宿所に充つる所とす。大少宮司の官舍は司廳の南にあり。又五十鈴川の東岸に。神宮文庫、神宮皇學館あり

○猿田彥神社

〔十六圖〕 宇治浦田坂の左側、二見氏の構内に坐す。同氏は世

に宇治の土公と稱せり。猿田彥大神の裔孫太田命より、系統連綿として今に至るといふ。

○神宮奉齋會大本部

〔十七圖〕 内宮電車停留所より約一丁、右側にあり。

神宮奉齋會賛成員の、取扱をなす所なり。

○外宮御正殿

〔十八圖〕 豊受宮又度會宮とも稱し奉る。

〔十九圖〕 登由宇氣神は百

穀發生の原素を掌り給ひ、衣食を幸ひ給ふ御神にして、天照皇大神宮御鎮座より四百八十二年の後、雄略天皇の二十二年九月望日、天照大御神の神託に依り、丹波國麻奈爲原より此大宮地に鎮座し給ひしなり。相殿神は御伴神三座坐ます

内院其他御構造方は、大體に於て内宮と同一なるを以て、改めて説かす。

○外宮一鳥居

〔二十圖〕 豊川に架す、一鳥居橋を渡り、右側に楠の老樹あり

枝葉鬱蒼として繁茂せり、清盛楠といふ。往古平朝臣清盛、勅使として参向せし時、其枝冠に障りしを以て、伐らしめしより斯くは名付けたりこそ。

○御白石持

〔二十一圖〕

白石も玉とや見にむ清くあかき心をもちて奉りなば

木野戸少宮司

○外宮神苑大鑄

〔二十二圖〕 神苑地は、内宮と同じく神苑會の經營せし所

なり。樹木泉石の配置、雅趣は實に神聖の風光を増し、皇太子殿下御手植松あり勾玉池あり。征清役紀念として、第二軍司令官大山大將の獻納したる、クルツ
式九珊米突砲、第一軍司令官野津大將の獻納したる、同式六珊米突砲と、檻槍

銃あり。日露戰役紀念として、海軍省より奉獻せし、大鎗ありて、一層の威嚴を添へたり。

○倉田山〔二十三圖〕外宮より内宮に通する、御幸通の中央にあり。南に神路の連峯を仰ぎ、東に朝熊の雄姿を望み、西に鼓ヶ岳、高倉山の翠黛を集め、遠く北勢の山脈を煙霞の中に觀、眼下に神都市街、及近郷村落を指點し、伊勢海の波光に、俗腸を清むる底の大舞臺なり。此の山上に、神宮撤下御物陳列所、及徵古館、農業館あり。神宮撤下御物陳列所に、陳列する御神寶は、明治二十二年御遷宮迄、宮殿内及寶殿に奉納されたる、古御物にして、何れも古代御神寶の通り摸造され、御遷宮毎に御造り替せられたるを、撤下されたるものなり。徵古館内には、開闢以來時世の推遷、人智の發達を徵すべき事物、即ち儀式、調度の諸器具より、武器、文物、美術、工藝等百般の事物を網羅せり。農業館内には農作、種樹、漁獵、牧畜、養蠶、工藝の器械、標本、摸形、圖書、統計等偏く蒐集陳列せり。

○豊宮崎文庫

〔二十五圖〕外宮神苑の東、岡本町にあり。此文庫は日本三文

庫の一なり。慶安元年の創立にして、神官の子弟修學の齋舍なり。其の講堂には室直清、貝原篤信、伊藤長胤、谷重遠、大鹽平八郎、藤森大雅等の諸先生も來りて書を講したり。去る明治十一年春、火災に罹り講堂其の他焼失したるも、書籍及大觀社の一構は幸に免かれたり。前庭頗る勝景に富み、春時は御屋根櫻に名高く夏季は海原なす青田の波に、晚涼を試みる人少からず、是亦神境の一勝區なり

○伊勢の花

〔二十六圖〕

うかれ女の袖ふる市の舞の手に引かれぬ人はあらじこそ思ふ蜀山人。

○伊勢音頭

〔二十七圖〕古市の特技なり。寛延の頃奥山桃雲といへる奇人、

今の伊勢音頭を新作し、備前屋主人、外宮にて奏したる鶴の舞を、折衷調和し、仕組たるものとす。手踊の始りは、拍子木の音を相圖に、三味線、胡弓、琴等にて囃し立つれば、踊舞臺おどりひたいせ躍り上り、欄間より五十餘箇の提打下り、華美なる雪灯に一層の光彩を加ふ、此の時左右兩花道より、手振面白く踊り出るなり。

○御幸通

〔二十八圖〕明治四十三年竣工せし、外宮より内宮に通る新國道にし

て御幸通みゆきさうと名命せらる。

○御塩殿神社

〔二十九圖〕 二見より十餘丁西、濱松繁りたる所に社殿あり。兩宮御料の御鹽を、焼き奉る所なり。皇大神宮の所攝に屬す。

○二見浦

〔三十圖〕 二見潟ともいふ。濱邊の砂清く、萬株の松、煙に和し、遠く海を望めば、尾參駿遠の連山を見放し、朝は立石の間に日出を拜し、夕は音無山の月を賞す、其の妙趣實に多く求むべからず。先年遠江の十湖宗匠、

月と日の間の一見の朝はらけ

と吟したる實にや。夏日は避暑の遊客を以て滿され、春暖秋晴の候、此の勝景を賞觀するもの、足跡を絶たず。

○朝熊岳金剛證寺

〔三十一圖〕 岳は伊勢志摩兩國に跨り、峯巒崇峻にして衆山に卓越せり。登山は内宮よりするを便利とす。里程七十二丁、急坂僅かにして、所々に茶店あり。途中の眺望佳絶にして、少しも倦怠を生せず。金剛證寺は山の絶頂にあり。虛空藏菩薩を本尊とし安置す。創立年月詳ならず。僧教侍の開基にして、空海は中興の祖なり。中世漸く頽廢せしを、東岳和尚此に退休して、禪宗臨濟派に改宗し、大に堂宇を修造せしを、近年火災に罹り、本堂を除く、外鳥有に歸せり。境内には明王院、矢追地藏、開山堂、呑海庵等あり。呑海庵前に富士見臺あり。暁望に富みたる仙境にして、雙眸に太平洋を收め、眼下に伊勢灣を望み、早天富士の靈容を拜す。實に是活畫の展觀臺なり。

海を呑む茶の子の餅や富士の山

一
休

○十八洲眺望

〔三十二圖〕 朝熊岳の頂き、裏坂に下らむとする所に茶屋あり豆腐屋といふ。東海十八洲を見晴し、四時の風光頗る雅致に富めり、極暑と雖も六十度を上らず、避暑の客少らずといふ。朝熊萬金丹本舗は、山門の前にあり東岳和尚退休の時、同道せし倚松軒宗祐、虛空藏の靈夢に感し、萬金丹の藥法を得、代々其の秘法を傳へ、盛に發賣の道を弘めたり。其の効驗は、世人遍く知る所なり。

○鳥羽港

〔三十三圖〕 舊稻垣氏の城下にして、志摩第一の都會なり。灣内水深く、西北に山を負ひ、東南に暖潮を受く、西に紀州灘、東に遠州灘を控へ、東西

航路の中心に位し、夙に良港の名あり。今や鐵道延長せんこす、海陸の便を受け益々發達を極めむ。港の北方に日和山あり、風光壯麗にして、波濤涵々の中島嶼洲渚の錯落層見するさま、恰も局面上に碁手を布けるが如く、人をして松島に遊ぶ想をなさしむ。

浦風も荒磯浦もけさなぎてかもめ立ちたつ鳥羽の海面
之れ明治十年一月二十六日、聖上御乘艦碇泊中の御製なり。

○鮑とリ〔三十四圖〕

ミはねごも深き心は伊勢の海の底なるあまにおどりやはする 齋 宮

○宮川鐵橋〔三十五圖〕 宮川水源は、大和、紀伊、伊勢、三國の境大臺原おほたいがはら山なる巴さるなケ淵より發し伊勢海に入る、長さ三十餘里なり。古は度會川、齋いつきみやかは宮川ともいひき。今は參宮線の鐵橋を架したれども、維新前は渡船にて、交通の便を圖りたり。其頃參宮者は水垢離を取り、然して後神地を踏みしこぞ。川の東岸左側に禊所ありて、神宮大祭に参向せられし、勅使、祭主宮殿下的修祓はらひを行れたるが、去三十八年都合に依て、此の禊所を、山田驛の南位なる世木社の境内に變更し、河原禊かはらはらひの古儀を執行せらるゝ事となれり。宮川堤の春色は、柳櫻をこきませて、錦帳の如く、誠に光明神都第一なり。

契ありて今日宮川のゆうかづら永き世までもかけて頼まむ 定 家

○山田停車場〔三十六圖〕 宮川以東を宇治山田市と稱し、又神都と稱す。其面積約七十三方町、町數三十、人口三萬八千餘なり。當驛は市の中央に位し、神都の咽喉部にして、參宮旅客の乗降、貨物の集散、頗る殷賑を極む。市内の交通機關として、驛前より電車縱横に通し、旅客に多大の便宜を與ふ。

すめらぎのはじめと思へば千早振伊勢こそ神の都なりけり

士 佛

明治四十三年十月十五日印刷
明治四十三年十月十七日發行

宇治山田市今在家町二十四番地

編輯兼發行者 八 束 卯 兵 衛

大阪市西區京町堀一丁目二十九番屋敷

印 刷 者 若 林 獨 立 軒

大阪市西區京町堀一丁目二十九番屋敷
印 刷 所 若 林 獨 立 軒

複製 不許



1

2

3

4